2008年度　中部日本高等学校演劇大会愛知県大会参加作品

滝高校演劇部

婆ちゃん！

作　瀧　源作

一場

亮　こんにちは。
僕の名前は伊藤亮。
僕の住んでいる石山町は、人口３８万人の市の中にある
わずか１５０メートル四方の小さな町です。
駅まで歩いて１０分、道をへだてた向かい側にはスポーツクラブがあり
その反対側には裁判所と小学校があります。
また、まわりには、大きなマンションが乱立していて都市化が進んでいます。
それなのに、うちの町内には喫茶店が二軒だけ。他の店は一軒もありません。
しかもウチの町内には一丁目、二丁目が無いんです。番地しかありません。
世帯数８８。６５歳以上の人口は１００人以上。つまり一家に一人、お年寄り。
こんな、小さいけれどお年寄りが元気な町に僕たち家族は暮らしています。
え、僕の家族ですか？
父さん、母さん、中学生の妹、そして…とっても元気なばあちゃんが一人。
（三ババの笑い声）
あの真ん中にいるのが僕のばあちゃんです。
亮　亮ちゃん、お帰りー。
竹内　お帰りー。
佐久間　ただいま。
亮　なに、部活？
婆　うん、そうだよ。
亮　この子ねぇ、バレー部で頑張っとるんだわ
婆　今日は将棋部だったんだ
亮　え？こないだはバレー部って言っとれせんかった？
婆　辛くてしんどいから辞めちゃった
竹内　いかんがね
婆　あんた何回変わっとるの
亮　え～と一、二、三、四…。
婆　まーえーわ。
佐久間　英恵ちゃん、わきゃーころは、いろいろ目移りするの
婆　ほーきゃね？
竹内　ほんなもんだわ
（三ババ　笑う）
亮　ばぁちゃん！ばぁちゃん！
婆　なにぃ？
亮　僕、上行ってるから。あ、そういえば婆ちゃん。
婆　なんやの
亮　ポチにまた赤いリボンつけたでしょ
婆　かわええがね
亮　何度も言ってるじゃん。ポチはオスだよ
婆　でもよろこんどったに
亮　あれは怒ってるの

婆　まぁええわ。あんた早よ、部屋戻りゃあ
亮　もうつけちゃ駄目だからね
婆　わかっとるわかっとる。。
亮　じゃあゆっくりしてって下さいね。
竹内　ありがとう。
（亮　ハケる）
竹内　まぁ、ええお孫さんだがね。
婆　ほんなことあらせん
竹＆佐　ほんなことあるわー
婆　ほんなこと言ったらあんたんとこのお孫さんの方が、ええ孫だがね。
竹内　賢そうだもんなあ。
佐久間　ほんなことあらせん
竹＆婆　ほんなことあるわー
佐久間　ほんなこと言ったら、あんたんとこのお孫さんが一番ええんじゃにゃーの？
竹内　どこがー。
婆　運動会でも、どえりゃあ早く走っとるがね。
竹内　ほんなことあらせん。
婆＆佐　ほんなことあるわー。
婆　まぁね。何だかんだ言っても、それぞれええ孫。
竹内　ほうだね。みんなええ孫。
三人　ええ孫。わははははは
（母　入る）
母　ただいまー。あ、いらっしゃい。
竹内　あ、お邪魔しとります。
母　いえいえ。
婆　英恵さん、今日は何買ってきたの？
母　今日は、お義母さんの好きな鯛のお刺身です。
佐＆竹　えーねー。
婆　まぁねぇ、ウチの嫁、私に気ぃ使わんでええって言ってるのにねぇ。
竹内　聞いて、昨日は鰻だったの。
母　あんた、幸せ者だねぇ。早死にしてまうんじゃにゃあの。
お義母さんには長生きしてもらわなくちゃ困りますから。
佐久間　えぇ嫁、ウチの嫁にも聞かせてやりてぇ。
婆　まぁ、私としては三国一の嫁を貰ったってとこ
母　三国一ってどういう意味ですか？
竹内　どこを探しても、一番ってことよ。
母　そんなことないですよ。お義母さん、すぐお夕飯にしますね。
竹内　え、もうそんな時間かね。
佐久間　私ら、帰るわ。
婆　はよ帰りゃあ。
佐久間　あ！英恵さん
母＆婆　はい。
佐久間　お嫁さんの方の英恵さん。

竹内　名前が一緒って、ややこしいねぇ。
佐久間　このあいだはお饅頭、ありがとね。
竹内　あ、それ食べた。ありがと。
母　どういたしまして。
竹内　あ、そうだ英恵ちゃんも、これごちそうさん
佐久間　いっつも貰ってばっかで悪ぃねぇ
婆　ええわ、気にせんでも。どうせ貰い物だで
佐久間　ありがとね。
竹内　いっつも気にしてもらって申し訳にゃあわ
母　お二人とも、お気をつけて。
文乃　気を付けてって言ったって三十メートルばかりのことだがね
母　でも何があるか分からないですから
佐&竹　ええ嫁だねぇ。わははははは
（佐久間・竹内　ハケる）
婆　ええ嫁。
母　ですって。
婆　わたしゃ、鯛の刺身は嫌い（きりゃあ）なの。
母　そう言われると思って、今日はコロッケしか買ってありません。
婆　…コロッケ。
母　お義母さんコロッケお好きですよね。
婆　わきゃあ頃の話よ。
婆　でもこの間三つもお食べになってましたよ
母　そんな昔のことは忘れた。ぼけたんかねぇ
婆　お義母さんまだまだお若いじゃないですか
母　よう言うわ。
婆　だってお元気じゃないですか。皆さんお揃いで。
母　何ぃ。いかんの？
婆　そういうわけじゃないですけど。こう毎日毎日家にあがられると…
母　私の家だでえーがね。
婆　それはそうですけど。
母　何？どっか出てきゃあええの？
婆　そんなこと言ってません
母　まあねえ、あんたはほんな文句言う前に、ここの生活になじんでもらわなかんね。
婆　ちゃんとなじんでます。
母　ほんだったら、名古屋弁もっとつかやええがね。
婆　私は名古屋弁は嫌いだって前からいってるじゃないですか。
母　ま、そりゃ私のこともきりゃあってこと？
婆　違います。
母　お父さん、聞いたってちょ。
婆　嫁がよぉ、私のこと嫌いだで出てけって言うんだに。
私、虐げられとるんかしらん
母　お義母さん、ここにあった羊羹しりません？
婆　羊羹？

母　私が注文した羊羹なんですけど
婆　あれ、あんたのだったの。さっきあげてまったがね
母　誰に？
婆　文乃ちゃんとみっちゃんだがね。あんたも見とったでしょ
母　勝手に人のものあげないでください
婆　おんなじ名前だで私に来たと思うがね
母　お義母さん、自分で注文したかどうかもわからないんですか？
婆　歳やでよう。名前が読み方も字も一緒だから、まちがってまうわね
母　でも毎回毎回じゃないですか
婆　ほんだったらあんた名前変えやぁ
母　変えれるわけないでしょう
婆　大体勇樹が悪いんだわ。母親と同じ名前の女を嫁にもらってくるでよう
母　お母さんが変えてください
婆　私はこの名前で７０年ちょっとずっとこの名前で通しとるんだわ
母　私だって親から貰った大事な名前です、お義母さんが変えてください。
婆　あんた変えやぁ
母　お母さんが変えてください
婆　あんた変えやぁ
母　お母さんが変えてください
　　（（父　入る））
父　ただいまー。
婆＆母　お帰り。
父　なんだよ。また何かあったのかよ。
婆　なんもありゃせんわ。ただね、また私が嫁にいじめられとるだけ。
母　お義母さん！！
婆　もう、毎日毎日やめてくれよ。ちょっとは仲良くできないの？
父　それは英恵さんに言ってちょ（同時）
婆　それはお義母さんに言ってください。
母　何ぃ。全部私があかんって言うの？
婆　そんなこと言ってません
母　私のやることなすこと全部気にくわんのでしょお。
婆　それはお義母さんじゃないんですか。
母　いやあたしゃ、いい嫁貰ったと思っとるよ。
婆　私だっていいお義母さんだと思ってます。
母　それなら仲良くすればいいだろ。
父　しとるがね。
婆　どこがだよ。
父　こんなええ嫁、何処を探したっておれません。
婆　こんないいお義母さんだって他にはいません。
母　何て可愛い嫁。
婆　何て素敵なお義母さん。
母　わたしゃ幸せ者だ！
婆　私の方こそ、幸せ者です！

父　だったら
婆&母　仲良くしてるでしょ！！！
父　それなら、満足です！
婆&母　よし！

二場

亮&禎　え～、クビ！？
父　チーン。
母　どういうこと？
父　さぁ？
母　なんで帰ってきた時すぐに言わなかったの？
父　だって言える状況じゃなかったじゃないか。
亮　一体これから僕達どうなるの？
禎実　借金？
亮　サラ金？
禎実　夜逃げ？
亮　一家心中？
亮&禎　死にたくない！
母　なんでクビになっちゃったの？
父　何でだろうな。
母　会社で何かしでかしたの？
父　何もやってなかったからじゃないかな
母　誰にクビって言われたの？
父　課長。
母　お中元、お歳暮、ちゃんと付け届けはしていたはずよ！
父　お年玉が足りなかったんだな
母　馬鹿なこと言わないで！。
あなた人事課でしょ？
父　うん。
母　人事課の人間が自分のクビ切ってどうするのよ。
父　だって切ったのは俺じゃないしさ。
母　明日からどうするの？
父　どうしましょ。
禎実　決めた。私、学校やめて働く！
父　お前まだ中学生だろ。
禎実　キャバ嬢でも飲み屋の女将だって何だってやる！
父　禎実。
禎実　好きにして。
父　こいつ、変！
母　それだけ必死ってこと！
父　そうかー。頼むぞ。
母　そんなこと出来るわけないでしょ！

父　そうだよな、まだ体がなぁ…。
母　そういうことじゃ無いの！
亮　父さん最低だな…
父　最低か？
亮　普通、明日から働くから心配するなとか言うもんでしょ！
父　おう。じゃあ明日から働くから心配するな！
亮　もう遅いよ！
母　働くって、あなたに何ができるの？
父　何だってできるさ。
母　たとえば？
父　ホスト。
亮　できると思ってんの？
父　酒は得意だよ。
禎実　お父さん二、三杯飲んだらすぐ寝ちゃうじゃない！
父　眠れるホスト…。どうにでもして。
（（母　座布団で叩く））
父　いってーな。何すんだよ。
母　いい加減にしてよ！
父　ホストのどこが悪いんだよ。
母　悪いわよ！
父　ヤキモチ？
母　あなた！
婆　（袖から）英恵さーん。シャンプー切れとるがねー。
父　…お袋。
婆　ちょっとー！
母　脱衣所の棚にあります。
婆　あーそーかい。
母　お義母さんのこと忘れてた。
禎実　ばあちゃんに何て言うの？
父　何も言わない。
亮&禎　へ？
父　いいかお前ら、ばあちゃんにだけは絶対言うなよ。絶対だぞ。
母　お婆ちゃんに知られたら、何言われるか分からないでしょ。
父　いいか、分かったな。
亮&禎　うん。わかった
父　あー、よかったよかった。
母　何がよかったのよ！。
父　いやー、だってもうこれでお袋にばれないだろ。
母　仕事はどうするの。
父　実はもう決めてあるんだ
母　そうなの？
亮　さすが父さん。
禎実　何の仕事？

父　駅前のコンビニ
禎実　やめてよ！あそこよく友達が行くんだから！
父　職業に貴賤は無い！
亮　あそこ、めちゃめちゃ忙しいんだよ！？
父　そっか。じゃあやめよう。
亮　やめるの！？
父　うん。
亮　さすが父さん…。
父　でもな、もう一個考えてあるんだ。
　ビルの清掃員。アレだったらできるさ。
母　片付けもロクにできないあなたに、そんなことできるの？
父　仕事だったら何だってできるよ。
亮　でも汚い便所の掃除だってしなきゃいけないんだよ。
父　え？
禎実　色々変なモノたくさんくっついてるらしいわよ。
父　そうなの？
母　あなたみたいな人も使ってるのよ。
父　やめよう。
亮　またやめるの！？
父　まいったなー。もう選択肢がなくなっちゃったな。
母　二つしか考えてないの？！
父　おう、それ以上考えるとパニックになるしな。
禎実　結局どうするの？
父　どうしましょ。
亮　あ！　僕、バイト情報誌持ってくるよ。
父　お前何でそんなの持ってるんだよ。
亮　夏休みにバイトしようと思ってたからさ！　ちょっと待っててね！
　（亮　ハケる）
母　どうして急にこんなことに…
父　どうしてだろうね。
　（婆　入る）
婆　あぁ良いお湯だった。あぁ、英恵さん
母　はい？
婆　ちょっとお風呂のお湯が足りいんじゃにゃーの。
父　今良い湯だって言わなかったか。
婆　あたしはそんなこと言えせん。
母　そんなにお風呂が気に入らないんだったら、
　自分でお湯でも足せばいいじゃないですか
　あたしぁねぇ、首までたっぷり浸かるのが好きなの。
婆　クビ！？
家族　お湯はたっぷり首までいれてちょ。
婆　はい、分かりました！
母　あー、禎実。
婆

婆ちゃんね、今日どえりゃあ肩が凝っとるんだわ。もんでちょうん！

禎実　婆　あー、ええ気持ちだ。

禎実　おばあちゃん首も凝ってるみたい。

母＆父　禎実！

禎実　ごめんなさい！

婆　何であんたが謝るの。ついでだで首もやってちょ。

禎実　う、うん。

婆　あぁいい気持ちだ。首がよう回る。

父　お、お袋は人使いが荒いよな。

婆　そう？かね勇樹、アンタもクビ揉んでもらうとえーわ。気持ちえーで。

父　俺は、首になんか問題ないさ

婆　妙な言い回し。

母　別にこの人の首は大丈夫ですから。

婆　あぁそう。　英恵さん、あんた最近痩せてきたんじゃにゃーの？

母　そうですか？

婆　ちょっとくびれてきた？

母　くびれてません！

父　ちょっと太ったんじゃないか？

母　あなた！

婆　（禎実に）あぁ、ありがとね。

父　なんか二人とも、今日はビクビクしとるねぇ。

婆　クビクビなんかしてないさ！

父　ビクビクだよ、ビクビク。

婆　どっちも一緒だろ。

父　変な感じ。

婆　そういえば今日、山田さんとこの犬が逃げ出して大変だったみたいだよ

禎実　そうなの？

母　あれはねー、首輪がスッポリ抜けてまったんだって。馬鹿だねぇ。

婆　馬鹿じゃないさ！何か特別な理由があったんだ！

婆　家のは大丈夫かい？

父　俺は大丈夫だよ

婆　あんたじゃないわ、ポチだわ

父　お袋、もうそろそろ寝たらどうだ？

母　そうですよお義母さん。早く寝たほうがいいですよ。

婆　まだ早いがね。今何時？

母　クビです。…9時です

婆　おかしな二人だねぇ。あぁ、英恵さん。この虞美人草ねぇ。

母　くびじんそう！？

婆　「ひなげし」のこと。

父　枯れとるで捨てといて。

枯れる、捨てる、くびじんそう…。

（チーン）

婆　おいっ、そんな不吉な花を供えるのやめろよ！
どうしたのおかしいねえ。じいちゃんの好きな花にまで文句言っとる。
（（亮　入る））
亮　父さん、父さん！見ていい仕事見つけたよ。
これね、工場の軽作業みたいなんだけど月給二十万！
資格年齢問わず！初心者大歓迎！
やる気のある方大歓迎、なかなかないよこんない仕事。
婆　父さんみたいなぐうたらにはこの仕事が一番だって絶対。
ほぉー、なかなかええ仕事だねぇ
亮　やっぱりそう思う！？
婆　で、誰が働くの？
亮　父さんに決まってるじゃん。
婆　なんでぇ？
亮　そりゃあクビになったからだよ。
婆　クビ？
亮　ばあちゃん！
婆　ほぉー。…勇樹ー！！

三場

母　あら、お義母さん
婆　ん、洗濯かい？
母　はい。
婆　平日はパート行って、日曜は洗濯してあんたも大変だねぇ。
母　いえ、今日は少しですから。お茶、お代わりお持ちしましょうか？
婆　えーわえーわ。
母　何召し上がっているんですか
婆　栗きんとん。あんたも食べる？
母　いただきます。
婆　お茶持ってりゃあ。
母　はい。
婆　ホントに勇樹も困ったもんだねぇ。
母　まさかこうなるとは思ってもみませんでした。
婆　いや、あたしゃ、いっつかこうなるって予想はしとったよ。
母　すみません。こんな事になっちゃって
婆　えーのえーの。別にあんたが悪い訳じゃにゃーのよ。
あいつの優柔不断なところというか、いい加減なところというかね、
そこを上司が見抜いたんだわ。
母　２５年もったのが不思議なくらいですね。
婆　あんたもそう思う？
母　ええ、少しは。
婆　いつか聞こうと思っとったんやけど、あんた、あいつの何処に惚れたの。
母　お腹。

婆　え！？あんたも変わっとるね。
母　私、太ってる人好きなんです。
婆　そうかー。デブ好みか。
母　どちらかというと。
婆　まぁね、デブの好きな女に、悪い人は居らん。
母　そうですか？
婆　デブを産んだ女にも悪い人はおらん。
母　そうですね。
婆　仕事は決まった？
母　まだみたいです。
婆　こにゃーだやっとったファミレスはどうしたの？
母　まかないが口に合わないって言うんですよ。
婆　客でもにゃーのに、何考えとんの。　あの馬鹿。
母　その次の工事現場じゃ、重い物持てないっていうし。
婆　デブでも力はないんだね。
母　学校の夜の警備員では、お化けが出たって泣いて帰ってきたんですよ。
婆　肝っ玉の小しゃあ男。
母　なかなか合う所が無くて。
婆　ハローワークは？
母　受付が気に喰わないそうです。
婆　まぁ。ホントにこまったもんだわね。今日はどうしとる？
母　気分転換に散歩に行きましたよ。
婆　それじゃ毎日（みゃーにち）が気分転換だがね。

（（父　入る））

父　ただいま。
婆・母　おかえり。
婆　気分転換は済んだ？
父　いやぁ最高だったよ！見て見てこれ。前から欲しかったんだ。
母　なにそれ。
父　プラモデル。
母　プラモデル？
父　パンダムだよ、パンダム。
母　パンダムがどうしたの？
婆　知らないのかよ、お袋。こんなんなぁ、珍しいんだぞ。
父　仕事探しもしないで、なにやってんだいあんたは！
婆　３５００円で買えたんだから、拾い物だろ。
父　３５００円？
母　そう。
父　あなた、今の状況分かってる？
母　おう。今俺、首の真っ最中。
父　こんな物買ってる余裕ないでしょ。
母　今しかないと思ったんだよ。
父　今やらんとあかんのは、仕事探しでしょお。
婆

父　「チャンスを逃すな！」それが俺のモットーだ。
婆　チャンスがあっても、取り逃がすのがアンタだわ。
父　そういうときもある。
母　返してらっしゃいよ。
父　やだ。
婆　いらん！
父　やだ。
母　子供みたいな事言わないの。
父　今は子供でもいい。
婆　英恵さんがどんな思いして今パートに行っとると思っとるの？
父　家計を支えるためだろ。
婆　時給８００円のパートで何時間も働いてねぇ、
母　その大切なお金をお前はコレに注ぎ込んだんだわ。
婆　お義母さん、私に言わせてください
母　言ったりゃあ
婆　私が働くのは別にいいのよ。
母　でも、お義母さんが可哀想でしょ？いい年して、いつまで親に心配かけてるのよ。
父　心配するというよりは、怒ってるだけのように思えるがな・・・
婆　だらしない息子。私の育て方がいかんかった。
母　勇樹、お前には男の気概ってもんはにゃあのか？
父　俺は男だよ。
婆　どこが男だ！男だったら、女房子供が尊敬するような男になってみろ
父　そこまで言われなきゃいけないのかよ？
婆　大体、英恵さんの東京の実家に、何て申し開きするの？
父　黙ってりゃばれやしないよ
婆　いつかバレるに。
父　バレるわけないよな。
母　東京の事は、私が何とかします。
父　あっそ。だって。
母　でも、近所の人にはバレると思います。
　　昼間っからブラブラブラブラしてるあなたの姿はほんとに目立つの。
婆　特にお腹がね。
父　そこは二人が何とかしてくれればいだろ。
母　どうしていつもあなたはそうやって人に頼ることしかできないの？
父　仕事見つけりゃいいんだろ？
母　だったら早く見つけなさいよ。
父　見つけるよ。
婆　あんた、どこ行くの！
父　部屋に戻るんだよ。
母　まだ話は終わってない！
婆　座りゃあ！
母　その気があるなら今すぐにでも行ってきなさいよ。そんな余計なもの買ってきて。
婆　そうだ。英恵さんの言うとおりだ。

父　余計な物？
婆　そうだ、余計な物だ
父　余計な物だったら、他にもいっぱいあるだろうが。
婆　何が？
父　お袋のバランスボール！
婆　アレは健康のためにええの。
父　買ってから一回も使ったことないだろ。
母　そのうち使おうと思ってたのよ、ねぇお義母さん。
父　それなら物置にある、お前のルームランナー。
母　あれも健康のためよ
父　あれも買ってから一回も使ったことないだろ
婆　そのうち使うつもりだったんだよね、英恵さん。
父　だったら玄関にあるお袋の招き猫。
婆　招き猫がどうしたの？
父　普通招き猫っていうのはな、片手をあげて、人とか金とかを招くもんだろ？
婆　そうだねぇ。
父　だけどお袋のは、両腕を組んで、偉そうにふんぞり返ってるだけじゃないか
婆　ありがてゃあ御利益があるんだわ。
父　あれはお袋そのものだよ。
母　酷い。
父　じゃあ何だ。お前の触るとやせる壺。あれ効果あったのか？
母　壷にはまったのよ
父　壷？
母　だったら貴方の、英会話セットはどうなのよ
父　それがどうしたよ
母　テープの再生の仕方だってわからないじゃない
婆　まあ、昔から外人さん見ると逃げ回っとったあんたが
父　なんで今更英語必要なのかねぇ
　そこまで言うかよ？だいたいな、うちには無駄なもんが多すぎるんだ
　北島三朗の写真集なんかな、特にいらない。
婆　あれは亮のだわ。
父　亮！
婆　まったく、何でもかんでも私や英恵さんのモノだと思いこむでねぇ
父　亮！
母　家のこと何にも知らないのね
婆　まぁね英恵さん、男なんてそんなモン
父　亮、早く来い！！亮！
　（亮　入る）
亮　何？
父　サブちゃんはいらん！
亮　何のこと？
父　これからウチは演歌禁止だ
亮　どうしたの、父さん？

婆　パンダムのせいで演歌は禁止だと。
父　とにかくな、ウチにはいらないものが多すぎるんだ。
母　これからは、余計なものは買っちゃいけない、ってことよ
婆　家計も厳しくなるでねぇ
父　いや、違う！いらないものは全て売る！
三人　え？
母　売るの？
婆　誰に？
父　バザーに出すんだ。今日俺が行ってきたところではな、来週もバザーがあるそうだ
そこでいらないものは全て売る
ほんなことしたら、わたしら貧乏人みたいに思われてまうがね
婆　なんでサブちゃんの写真集まで売られなきゃいけないの？
亮　家計のためには贅沢は禁止だ
父　演歌って贅沢？
父　くどい！
禎実！禎実！
（（禎実　入る））
父　さっきからうるさいわねぇ。　何？お母さん。
禎実　呼んだのは俺だ。
父　何？お父さん
禎実　おまえの持ってるぬいぐるみな、あれ全部売りに出す。
父　うそー！
禎実　本当！
父　お母さん！
禎実　母さんは承知済みだ。婆ちゃんなんか大賛成だぞ
婆　ばあちゃーん！
父　来週はみんなでバザーか。お前も売れるとええねぇ。
売れたら売る！

四場

亮　ポチ
犬　ワン
亮　逃げるな、ポチ
犬　逃げるに決まってるだろ
亮　なにをそんなに吼えているんだよ
犬　俺を売る気だろ
亮　バザーに出すだけだよ
犬　じゃあこの五百円ってなんだ！
亮　だから吼えるなって！
犬　しかもこのリボン。
亮　もう、どうすんだよ本当に！
犬　ババアが何度もつけやがるんだ

亮　なんで怒ってるんだよ。
犬　怒りたくもなるよ
亮　僕だって売るのは心苦しいんだよ
犬　やっぱり売るんじゃないか
亮　ほら、あっちにはおいしいエサがあるよ。
犬　そんな手にのるか！
亮　頼むよポチ！
犬　絶対嫌だ。
亮　おいで。
犬　かむぞ！
亮　いいから来い！
犬　ほんとにかむぞ！
亮　もうどうすんだよ。みんな待ってるのに。
犬　知るか。
亮　あっ！もしかしたらすごく素敵な飼い主に出会えるかも知れないよ。
犬　えっ？
亮　ポチ好みのかわいい女の子で。
犬　ウソ！？
亮　しかもお金持ち。
犬　そりゃたまらん。
亮　もちろんエサは最高級。
犬　ワンダフル。
亮　いいでしょ。
犬　ワン。
亮　行く？
犬　ワン。
亮　よし行こう！
犬　さらば伊藤家！
父　ポチ！！
犬　ワン。

四場

（（バザーの喧騒））

小栗（子）　早く！早く早く！
上松　待ってよー
（（小栗と上松　が駆け抜ける））
婆　もう全部売れたのかね
母　何かコツはあるんですか
狩谷　ねえよ！
（（狩谷　ハケる））

禎実　どうしてウチは売れないの
父　まだまだこれからだ
亮　やっぱりサブちゃんの写真集売るのやめない？
父　くどい！
（（平山・岩瀬　が入ってくる））
平山　あれ、亮じゃん
亮　あ。
岩瀬　お前も出してたんだ
亮　うん、ちょっとね
母　お友達？
亮　うん。クラスメイトの岩瀬と平山。
婆　ま～！　いつも亮がお世話になっとります。　これ、買わん？二千円！
母　お義母さん！亮のお友達にそんな押し売りみたいなことしちゃ駄目じゃないですか。
これなんてどう？二千八百円。
亮　母さん！もう恥ずかしいからやめてって！（友達に）ごめんな。
禎実　そういえばお兄ちゃん、北島三郎の写真集出してるよ
平山　え！お前、北島三郎好きだったの？
亮　いや、これは…そう、死んだじいちゃんのだよ
婆　亮、それはあんたのだろ
亮　ばあちゃん！
父　お前ら、一体何が欲しいんだ！
岩瀬　いや、僕たちは
父　どっちなんだ！
岩＆平　失礼します！
父　何だ、冷やかしか。
亮　父さん！
禎実　お父さんが怖いから帰っちゃったんだよ
父　いや、あいつら最初から買う気がなかったんだ。。
婆　アンタ物売るの下手だね
父　そう？
婆　普通ね、いらっしゃいとか、そういう風に言うもんだに。
父　いらっしゃい！　こっちへ来い、いらっしゃい！　何か買え、いらっしゃい！
母　そんなんじゃ売れないわよ。もっと、心を込めて売らなきゃ。
誰かに的を絞って、みんなで声をかけましょ。ほら、あのおじいさん！
（（岩田　が歩いてくる））
家族全員　いらっしゃい！　にっ！（笑う）
（（岩田　去って行く））
父　やっぱり駄目だったじゃないか。
禎実　どうしてウチだけ売れないのー？
婆　やっぱり品物がイカンのかねぇ
父　いや、見る目のある客がいないんだ！
（（中村（子）　が走ってくる））
中村（子）　あ！パンダムだ！お母さんお母さん！パンダムがあったよ！

中村　　まぁ、よく見つけたわね
中村（子）欲しい！お母さん！
中村　　分かったわ。買ってあげる
中村（子）おじさん！
父　　何だ！
中村（子）これ、いくら？
父　　二十八万五千円！
中村（子）お母さん、二十八万五千円だって。
中村　　えっ
中村（子）買って！買って！
中村　　それはちょっと買えないわ。でも、お安くなるんでしょ
母　　ええ、それはもちろん。
中村　　おいくら？
父　　三十五万五千円！
中村　　さっきより高くなってるじゃない
母　　あなた！　もともと三千五百円じゃないの
父　　いや、これはプレミア物なんだ
中村　　プレミア？
父　　俺の思いが嫌というほど詰まってる。
中村（子）気持ち悪い。だったらいらない。お母さん！行こ！
　　（二人は行こうとする）
母　　ボク、ボク！この子犬どう？５００円。
中村　　子犬にしちゃ大きいわね
母　　絶対、吠えないんですよ
犬　　わん。
中村（子）吠えた。
母　　ご挨拶よ。かわいいでしょ
中村（子）かわいい？
犬　　かわいい
中村（子）何か吠えた
母　　きっと、ボクのことが気に入ったのよ
中村（子）でも、馬鹿っぽいよ。この犬
犬　　お前よりはマシだ
中村（子）何かうなってる
母　　餌なんかほとんどいらないし
犬　　食べるに決まってるだろ
母　　散歩もしなくていいのよ
犬　　こいつらが怠けてるんだよ。
母　　おまけに血統証つきよ！
犬　　ついてません。
中村（子）さっきから、ブツブツブツブツ気持ち悪いよ、この犬
中村　　そうね。なんかちょっと変ね
中村（子）　お母さん、あっち行こ

中村　そうね。東門の方行ってみましょ
中村（子）うん！（走り出す）
中村　ちょっと、そんなに走ったら転ぶわよ！ちょっと！
（（二人は去る））
（（ふみがルームランナー））
父　何やってんだ！この悪ガキ！
（（ふみ走って逃げる））
小栗（子）べーだ
父　まったく最近の子どもは
亮　ねぇ、もう父さんやめよ？
父　何言ってるんだ！
母　そうよ！　まだ一つも売れてないじゃないの！
亮　僕、もう嫌だよ。恥ずかしいし
父　何が恥ずかしい！
亮　だって、友達も来てるんだよ
父　それが何だ！
家族で一緒に働く！素晴らしい姿じゃないか。むしろ、自慢してやれ
母　恥ずかしがることなんてないわ
禎実　でも、売れてないよ
全員　はあ（うなだれる）
（（猫　入ってルームランナーで走る））
父　こら！あっち行け！
猫　邪魔したにゃん
弘樹（犬）気にするな
婆　めちゃくちゃじゃないか。まぁ、やめよまい
母　お義母さんまでそんなこと言わないで下さい
婆　じゃ、あんた売れるのかい？
母　私一人が頑張ったって・・・
婆　何？　私が頑張ってないみたいな言い方
母　そんなこと言ってません！
婆　あーあ。こんなとこにまで来て嫌味言われるとはねぇ
母　お義母さん！
父　おい、やめてくれよ。みっともない
婆　何がみっともにゃーだ！
亮　人が見てるよ
婆　ほんなもん、お母さんに言ってちょ
亮　母さん。
母　そういうこと、子どもに言うのやめてください。
禎実　お母さんもやめてよ。
母　それはおばあちゃんに言いなさい
婆　なに、全部私がいかんの？
（（古瀬　船橋の笑い声））
母　ちょっと待って！

婆　どうしたんだい
母　近所の古瀬さんと船橋さんです！
婆　隠れろ！
（（全員　顔を隠す））
（（古瀬　船橋が商品を見ている））
亮　母さん、何で隠れなきゃいけないの？
母　だって恥ずかしいじゃない。同じ町内の方よ
禎実　さっきと言ってること違うじゃん
父　静かにしろ！ばれるじゃないか
禎実　でも乞食みたいだよ
婆　いいの、みんなで協力して追っ払うんだよ
古瀬　ねぇねぇ！何かオススメないの？
全員　ありません！
船橋　これ、いいじゃない！いくら？
婆　もう売れました。
船橋　じゃ、英会話セットは？
母　飾りです
船橋　この壷は？
父　売り切れです
古瀬　あら、あなた方、どこかで会ったことないかしら？
家族　会ってません
古瀬　…そう。じゃあ、あのぬいぐるみはいいのよね？
父　ダメです
古瀬　ケチ！
父　ケチで結構。
船橋　この招き猫は？
母　お帰りください
船橋　何よ、それ！
古瀬　こうなったら、意地でも買ってやるわ！
船橋　そうよ、売りなさいよ！
全員　嫌です！
船橋　嫌って何よ！
古瀬　お客をなめるんじゃないわよ！売りなさい！
全員　売りません！
船橋　売れ！
全員　売らん！！
古&船　だったら、くれ！
全員　絶対、やらん！（顔を出してしまう）
古&船　伊藤さん！
全員　違います！

五場

家族　ばぁちゃん！
婆　ううぅう。
父　仕方ないじゃないか。ばれてしまったもんは。
婆　あたしゃはずかしくて死んでまいたいわ。
母　まさか、あんなとこに古瀬さんと船橋さんがいらっしゃるなんて。
禎実　だからやめようっていったのに
父　バザーの何が悪いんだ。今時誰だってやってるじゃないか。
婆　世間じゃそうかもしれないけど。
父　だろ？
婆　でもうちの町内じゃバザー出すなんて恥ずかしいことなんだわ
母　狭い町内だからすぐに知れ渡ってしまいますしね。
婆　どんな顔して暮らしてきゃいいんだよ。
亮　でも、大変だってわかったら町内の人たち助けてくれるんじゃない？
婆　だから、それが惨めなんだよ。
禎実　バザーに出したって、結局ひとつも売れなかったしね。
婆　ますます惨め。
父　売れなかったのは、お前らの責任だろ。
婆　あんたはすぐそーやって人におしつける。
父　うるさい。
母　あなた！
婆　あたしゃもう帰りたない。
母　わたしもです
父　なんだよ、二人して。　俺だって…俺だって帰りたくない。
禎実　さっきと言ってること違うじゃん。
父　やかましい。
婆　とにかく町内の人にはみつからないようにせなかんね。
全員　うん。

（（石原　入る））

石原　伊藤さん、伊藤さん。
母　あ、石原さん。
石原　聞いたわよ。
母　えっ？
石原　ご主人大変だったんですってねぇ。
母　えぇ、まぁ
石原　会社クビになったんですってねぇ？
亮　どうして、ご存知なんですか？
石原　もう町内で評判よ。
禎実　なんで！？
石原　バザーでも何も売れなくて大変だったんでしょ
婆　えぇ、まぁ
石原　家計がお苦しいってことは聞いています。
　これ、よかったら今晩のおかずの足しにでもと思って
父　折角ですけど、施しを受けるっていうのは…

母　あなた！
石原　そんなんじゃないです。　困ったときはお互い様でしょ。
　何かできることがあればと思ったんですけど、余計なお世話だったかしら
母　いえ、そんなことないですよ。ありがとうございます
婆　英恵さん、受け取るのかい？
母　折角の石原さんのご厚意ですから
婆　あ、そう。
　（（益岡　入る））
益岡　いやぁ伊藤さん、ここにいらっしゃったんですか。
父　あぁ、益岡さん
益岡　聞きましたよ。お仕事をお辞めになったそうで。
父　え？
益岡　で、北海道へはいつ行かれるんです？
父　北海道！？
益岡　酪農されるんですよね？
父　酪農？
婆　誰が北海道行くの？
母　益岡さん、違います
父　クビになっただけで、北海道へは行かないんですよ
益岡　あ、そうだったんですか。じゃあ、次のお仕事は？
婆　まだ決まっとらんのですよ。
益岡　でも、家財道具全部を売っぱらって引っ越しをされるっていうのは本当ですよね？
亮　引っ越しなんかしません！
禎実　家財道具なんか売ってません
母　誰からそんなこと聞いたんですか？
益岡　町内の皆さん口々にそう言ってますよ
婆　こういうのは、尾ひれはひれがついてとんでもないことになってまうねぇ。
　（（土川　入る））
土川　英恵ちゃん！
母＆婆　はい。
土川　いや、年寄りの方の英恵ちゃん！
婆　はい。
土川　いやぁ大変だったねえ
婆　マー君どうしたの？
土川　英恵ちゃんの一大事って聞いたで、飛んできたんだわ
婆　あぁそれはありがとう。
　で、あんたはどういう風に聞いてんの？
土川　一家離散で、英恵ちゃん行くところがないんじゃろ？
婆　うっそぉ。
土川　んだで、ワシが迎えに来たんだわぁ。
婆　は？
土川　結婚しよう
母　お義母さんよかったじゃないですか。

婆　何言っとんの！？
父　お袋、おめでとう
婆　たわけか！
　何が悲しくて、こんな人んとこ行かなかんの
土川　恥ずかしがらんで、飛び込んでこい！
婆　わたしゃあんたが嫌いなの
土川　自分に素直になれない女もカワエエのぉ。
婆　好きにやっとりゃ
　（（古瀬、船橋　入る））
古瀬　伊藤さん！
母　古瀬さん、船橋さん。
船橋　コレ、使って
古瀬　あれから急いで帰って、家にあるものとってきたのよ
母　いやでも、その
船橋　いいのよいいのよ。気にしないで。
母　もしかしてクビの事町内の皆さんに・・・
船橋　大丈夫。誰にも喋ってないから。
一家　え、でも・・・
石原　私、長谷川さんの奥さんから聞いたわよ
古瀬　あら、長谷川さんの奥さんおしゃべりねえ。
船橋　あれだけ黙っといてって言ったのにねぇ
益岡　わたしは、細川さんから喫茶店で聞いたんですがね
古瀬　細川さん…あ、内田のおじちゃんか樋口のおばちゃんから聞いたのよ
船橋　しまった～。あの2人にだまってて言うの忘れてた！
古瀬　人の口に戸は立てられないわね。
船橋　まって、もしかして水野の奥さんじゃない？
船＆古　　ははははは。…それはないわ。
婆　ちょっと。あんたたち、どんだけの人に喋ったの
船橋　全然喋ってないですよ。怖いわねぇ。
船＆古　あ、おばちゃん、おばちゃん、こっちこっち！
竹内　あぁ、いたいた。英恵ちゃん、聞いたわよ、大変だったがね
佐久間　ビックリしたに
婆　何あんたたちも聞いとんの？
佐久間　なんで言ってくれなかったの。水臭やあわ。
婆　いや、それはねぇ
佐久間　これ、受け取ってちょ。
婆　なにこれぇ。りんご？
佐久間　英恵ちゃんの為に二人で買ってきたんだわ
婆　いらんわこれ
竹内　ええ。なんもいわんでええ。なんもいわんでもええ。
婆　何であんたが泣くの？
佐久間　文乃ちゃん話聞いてからずっと泣いとるんだわ
竹内　私もう自分のことみたいに悲しいんだわ。

婆　そんなに泣くことかねぇ
竹内　英恵ちゃん、何があったってずっと一緒だでね。
（（水野姑　入る））
水野姑　英恵さん
婆　はい。
水野姑　これ、よかったら貰ってちょ
婆　でもアンタそれいつも、使っとるやつでしょお？
水野姑　もうワシには必要あれせんでよお。
婆　お婆ちゃん、なんかあったの？
（（水野嫁　入る））
水野嫁　お義母さん、そんなもん伊藤さんに押しつけたら迷惑じゃないですか
水野姑　ほんでも…。
水野嫁　伊藤さん聞きましたよ、大変なんですってねぇ
婆　いやぁ、お恥ずかしい
水野嫁　ほらお義母さん帰りますよ、明日の準備があるじゃないですか
水野姑　わかったわぁ。
婆　お婆ちゃん、何かあったの？
水野嫁　すみません、母が余計なことしちゃって
婆　いいえぇ。
水野嫁　じゃあ、失礼しますね。
（（水野嫁　ハケる））
婆　なんかあったんかね？
竹内　明日水野さんとこ、老人ホームに行くんだと
婆　え？
一家　そうするしかなかったんだわ
佐久間　嫁さんと折り合いが悪かったもんでよぉ
竹内　行かされるというか、自分から行くんだと
佐久間　ほうきゃ。
婆　年寄りは、辛くともどこかで身を引かないかん時もあるでなぉ。
土川　って、なんでそんなことせなかんの。ねぇ
婆　そうだわ。ねぇ。
佐久間　何が悲しくて気の合わん嫁さんの言うこと聞かなかんの。
竹内　言うこと聞けっていったって聞かん人ばっかだわねぇ
船橋　もっとかわいい年寄りばっかりだったらなんにも問題無いのよ
古瀬　どういうことというの
竹内　若い人にはこういう人が多いんだわ
婆　うちの町内、こういう年寄りばっかよね
船橋　まあまあ皆さん、もめないでくださいよ
益岡　もめて無い！
全員　（（全員騒ぐ））
土川　おぉ由希子ちゃん、由希子ちゃん、どうした？
亮　由希子ちゃん！？

（（由希子　入る））
由希子　これ、クッキー。
お腹が空いたら…食べてね
亮　…ありがとう。
（（由希子　ハケる））
全員　おぉ～！
亮　違うよ！そんなんじゃないよ！違うって！全然違うよ！
（（全員騒ぐ））
小栗母　伊藤さん、伊藤さん！探した探した
母　小栗さん。
小栗母　もう聞いた聞いた、全部聞いたわよ。大変だったわねー
母　はい
小栗母　これからどうするの？大変よねえ？そうよ大変よ！
だから、私考えたんだけど。
母　はぁ。
小栗母　亮ちゃんと禎実ちゃん、うちで預かるわ。
全員　え？
小栗母　だって大変じゃない。
子供二人いると、食費だったり電気代だったりガス代だったり。
ちょっとお母さん！待って
小栗娘　何？
小栗母　私やだ。
小栗娘　何言ってるの。いいお兄ちゃんとお姉ちゃんができるのよ
小栗母　で、わたしもう今日から預かろうとおもっているのよ
母　いや、でも
小栗母　気にしない気にしない、大丈夫よ
小栗娘　お母さんお母さん！
小栗母　なに？
小栗娘　二人も家にきてどこで寝るの？
小栗母　どこでも寝れるわよ。ねえ？
小栗娘　どこでも！？
亮　伊藤さんとこは大変なんだから、助け合わなきゃだめでしょ。
小栗母　私嫌だからね！
小栗娘　わがまま言わないの
小栗母　絶対に嫌！
小栗娘　フミ！
小栗母　いやいやいやいやあっ！！
小栗娘　フミちゃん、二人ともフミちゃんのお家には行かないから、大丈夫よ
母　ほんと？
小栗母　立ちなさい
小栗娘　本当よ。すいませんでした、ご心配おかけして。ウチは大丈夫ですから
母　そう？　でもウチは準備万端だから、いつでも言ってね
小栗母　ありがとね、小栗さん。
婆

小栗母　どんとこいよ！
竹内　よう言った。それでこそ町内の人間だわ。
（（全員騒ぐ））
西山　やあ皆さん。おそろいですなあ。
小栗母　町内会長！？
西山　伊藤さん聞きましたよ、このたびは大変でしたなあ。
父　どうもご心配をおかけしました。
西山　いや、人生にはいろいろなコトがつきものです。
しかし、そのために町内会があるのです
父　ありがとうございます。
西山　そこで私は考えた。
あなた方の町内会費を一年間免除しようと思いますが、皆さんいかがでしょう？
家族以外　おぉ～
西山　ありがとう。ありがとう。
婆　いや町内会長、そんなことをしてもらっては申し訳にゃあ
西山　何を言っとんの英恵さん。　町内の人間がお互い助け合わんでどうすんの
婆　ありがとね
西山　そこで伊藤くん！一番肝心なのは、君の仕事だ！
父　はい、そうです
西山　だからわしがいくつか仕事を紹介してあげようと思うのだが、どうかね？
母　お気持ちはありがたいんですが、
西山　どうした？
父　面接にもいくつか行ったんですけど全てだめで。
西山　そうか、でも建築関係なら。
母　この人、力が無いんです。
西山　じゃあ、夜の学校の警備員は？
母　夜の学校は怖いそうです
西山　だったらハローワークにいってわしが一緒に・・・。
婆　受付の人間が気に食わんのやと
西山　は？
母　うちの人、みかけの割に力も度胸も社交性も無いんです
西山　そうか、太っているだけか
父　すいません
それはしょうがない、では今ここでワシができることといったら、
町内会費を免除することと
伊藤家にエールを送ることだけだが、皆さんいかがでしょう。
益岡　よ、町内会長！
土川　ええ話や！
佐&竹　よかったわね、英恵ちゃん。
婆　まぁよう分からんけど、ありがとね。
西山　それでは、皆さんにご賛同いただきましたので、よろしくご唱和お願いします。
全員　はい！
西山　それでは伊藤家の益々のご発展と栄誉を祈念して、バンザーイ

全員　バンザーイ
西山　バンザーイ
全員　バンザーイ
西山　バンザーイ
全員　バンザーイ

六場

母　ねえ。ねえ
父　あ？なんだよ？
母　クビのこと、町内のみんなに知られちゃったわね
父　まあいつかはバレる事だったからな
母　お義母さんじゃないけど、なんか複雑。
父　いろんなもの貰っておいてよく言うよ。
母　もらわない方がよかった？
父　別にいいんじゃないか？　くれるっていうんだし。　黙って貰っとけよ。
母　あなた本当にそれでよかったの？
父　お前までお袋みたいなこと言うなよ。
母　そうじゃないけど・・・
父　お袋どうした？
母　疲れて上で寝てる。
父　そうか、今日一日大変だったもんな。
母　お義母さん、連れてかないほうがよかったかもしれないわね。
父　ついて来るって言うんだもん、仕方ないじゃないか。自業自得だよ
母　酷い言い方。
父　お袋大丈夫かな？ちょっと見てきてくれよ
母　ハイ。　お義母さん。お義母さん？
婆　大丈夫ですか？
母　あぁ、大丈夫だよ
母　疲れ、少しは取れました？
婆　なんとかね。　しかし参ったねぇ、万歳三唱だなんて。出征兵士じゃあるまいし。
　　時代感覚がズレとるね。
父　お袋、大丈夫か？
婆　あー？大丈夫だよー。
父　もう歳なんだからな。あんまり無理すんなよ
婆　無理させたのは誰ぇ。
母　起きて大丈夫ですか？
婆　あぁ、お茶一杯ちょ。
母　はい。あなた、お茶は？
父　いらない。
婆　バザーは売れぇへんし、帰ってきたら町内のみんなに
　　知れ渡とって、大恥かいてまったねえ
父　まぁいつかはバレることだからな。これでよかったんじゃないか？

婆　あんたの仕事が早く見つかればそれで済むことだがね。
父　わかってるよ。
婆　おまけに色んなものまで貰ってよ。ウチは乞食じゃにゃあんだに
母　でも、町内の皆さんのご厚意ですから
婆　ウチも落ちぶれたもんだわ。　子供たちはどうした？
母　疲れてそこで寝てます。
婆　あーあ。可哀相なことしたねぇ。
父　こんな小さい内から、町内の恥かきっ子になってまってねえ
婆　いい加減にしろよ。ネチネチネチネチと。
父　愚痴のひとつだって言いたくなるわさ。
婆　全て俺が悪いんだろ？だがな、
父　クビになったのは俺のせいじゃない。
婆　あんたのせいだよ。
父　あんたがしっかりしてないせいで、私たちみんながこうやって恥をかくことになるの
母　わかったよ。英恵、肩揉んでくれるか
父　ハイ。
母　仕事もせんのに、どうして肩が凝るのかねぇ。
婆　勇樹さんは職探しで疲れてるんですよ。
婆　探したって見つからなかったらなんにもなりゃせんよ。
父　男子一生の仕事っていうのは、なかなか見つかるもんじゃないんだよ。
婆　アルバイトもろくに出来んような男が偉そうに。
父　それだけ慎重ってことなの。
婆　お前、肩揉んでもらうより、口でも揉んで貰ったほうがいいんじゃにゃあの。
母　よう動く口だで。
婆　お義母さん、勇樹さんを助けるのが、私たち家族の役目じゃないですか
婆　まるで私が助けてないような口。
母　そんなつもりじゃないですけど。
婆　そりゃあんたは偉いわさ。朝からずっとパートで働きっぱなしで
婆　家のことはほったらかして、ほんとにアンタはよう頑張っとるね。
父　お袋！
母　ちゃんと家事もやってるつもりです。
婆　ごめんよ、私があともう三十も若りゃねえ。
母　働けん年寄りが余計な口をきいてまったかねえ
婆　じいちゃんはええ時に死んだわ。はよ私を迎えに来てくれればいいのにねえ。
母　お義母さん！
婆　嫌味かい？コレも。そうか、そう聞こえちゃったんだねぇ。
母　私、別に働くのが嫌で言ってるわけじゃありません。
婆　お義母さんさんに働けとも言ってません。
父　働いて貰えばいいじゃねえかよ。
婆　町内で遊んで嫌味ばっか言ってるんだったら、
母　お袋にも働いてもらえばいいじゃないかよ。
婆　尻拭いしろってのかい？私に？　まあ確かにあんたは得意だったわ、昔から。
母　お義母さん、いい加減にして下さい！

婆　今度はアンタが怒るのかい？夫婦揃って年寄り苛めて、面白い？
母　都合のいい時だけ年寄り年寄りって
亮　もうやめなよ二人とも！
父　大人の話に口を出すんじゃない
亮　僕だって家族だよ。　子供だからって、口を出しちゃいけないっていうの？
婆　ああそうだ、よう言った、亮。あんたはここの跡取り息子だでね。
　親が間違っとったら、それを正す。立派に成長したもんだわ。
父　親が間違ってるから俺も言ってんだろ
婆　私のどこが間違っとるって言うの。
　町内で乞食みたいな真似をせんといかんくなったのは一体誰のせいだと思っとるの
母　お義母さん、それは言いすぎです
婆　くれるからって、ニコニコして手を差し出す嫁がどこにおるの！？
母　物をもらうことが、そんなにいけないことですか？
婆　恥ずかしいとは思わんのかね

亮　町内の人たちは僕たちに親切にしてくれたんじゃないか。
婆　親切？ありゃあ、私たちを見下してるだけ。
母　お母さんだっていつもお義母さんだっていつも、
　みんなに色々物をあげてるじゃないですか
　あの人達は人から施しを受けるということを恥ずかしいとは思っとらんのだわ
婆　でも町の人達は僕たちに親切にしてくれたんでしょ
亮　親切？あれは、見下しとるだけ。
婆　じゃあお義母さんが人にものをあげてるってことは
母　そうだよ、見下しとるよ。
母　なんでもかんでも貰って喜ぶっていうのは、お里が知れるってこと
婆　でも、佐久間と竹内のおばあちゃんも、心配してきてくれたじゃないですか。
婆　その二人だから余計嫌なんだわ
父　幼馴染でしょ？
婆　私たちはねえ、心のどっかでお互いに負けたくないと思っとるの！
　これじゃあ、あんまりにも私が惨めじゃないか。
母　そうやって自分のことしか考えない。
婆　自分で自分のことを考えんで、誰がアタシのこと考えてくれるの。
　あーあ、家にも町内にも私の居場所が無くなってまったねえ。
父　だったら出てけばいいじゃねぇかよ。
婆　出てく？
婆　今日の水野の婆ちゃんみたいに、老人ホームでも何処でも行けばいいじゃないか。
父　勇樹！それが実の親に向かって言う言葉か！？
婆　お父さん、婆ちゃんにそれは酷いよ！
禎実　うるさい！居場所が無くなったんだったらな、何処へでも行けばいいんだ。
父　ああそうですか、ようわかりました。
婆　あたし一人が減れば人様から物を貰うのも見んでええし
　口減らしもできてええことばっか。

亮　マーくんの言っとった事は本当だね、年寄りはどっかで身を引かなかん時もある。
母　それじゃあ皆さん、お世話になりました
　ばあちゃん、出て行くことないよ。
母　そうですよ、お義母さん出て行かないで下さい。
婆　一番出て行ってほしいのはあんたでしょう。
母　どうしてそういう卑屈なものの言い方しかできないんですか。
婆　卑屈じゃにゃぁわさ。私ははっきり物を言うとるだけ
母　言っていいことと悪いことがあるでしょ
婆　なに言ったってあんた大事にしてくれんがね
母　私はお義母さんのこと大事にしています！
母　形だけじゃないか。やること為すこと全部文句つけて。
婆　言い方に気をつけてください。
婆　嫁は、心から姑を大事にするもんだ。
母　大事にされる姑になってみなさいよ！
母　姑に条件はいらん！
婆　年寄りだからって、なんでも許されると思ったら大間違いよ！
婆　それが嫁の言う言葉か！
母　嫁にだって口はある！
　（婆、母を平手打ち。その後母もやり返す）
父　英恵っ！！
母　…。ごめんなさい！
祖実　婆ちゃん、この家から、出てった方がいいよ…。
亮　祖実お前、お前何て事いうんだ！？
祖実　婆ちゃんがいるせいで、お父さんとお母さんいつもイライラして
　あたしもう耐えられない！
亮　お前、婆ちゃんに謝れ！
祖実　やだ！婆ちゃんに振り回されるのはもう嫌だ！
婆　そ、そうだよねぇ…。祖実の言う通りだわ…。
婆　婆ちゃん？
亮　亮、ええのよ。
婆　祖実は正直な子だでねぇ。やっと本当のことを言ったのかもしれんわねぇ。
　私もちょっと、ワガママが過ぎたねえ
亮　婆ちゃん…。
婆　悪かったねえ、ワガママだったね…。
　やっぱり私は、この家から出て行くわね
母　お義母さん！出て行かないで下さい
母　絶対に、この家から出て行かないで下さい！
　（母、出て行こうとする）
婆　英恵さん！あんたは出て行っちゃいかん。
　あんたは、この伊藤家に嫁に来たんだで。
　なにがあっても、出て行っちゃあいかん。
母　お義母さん…
婆　私も、出て行かんから。

母　ワァァァァン（叫び泣き）
亮　婆ちゃん、母さん、僕は、みんなと一緒に、暮らしたい。
婆　はい。なんかお腹空いたねぇ。
　勇樹、あんたも今日は一日働いて、疲れたでしょう
　亮、町内の人から貰った食べ物、もっておいで
亮　うん
婆　五人分あるかね？
亮　んー、あられとか、おせんべいばっかで、夕飯五人分はないんじゃないかな
婆　あぁ、そう。じゃあ、何か買っておいで。
　（（父　財布からお金を出そうとする））
婆　財布ごと渡してやりゃあ。
亮　じゃあ行ってくるね。
婆　うん、気をつけてね
婆　婆ちゃん、ごめんね。
禎実　何をシケた顔しとんの。ここにおると決まったんだで、
婆　どーんとしてなきゃね。英恵さん、お茶換えてちょ
母　はい。
婆　嫌なことは全部食べて忘れる、と。
父　そうだよな。
婆　馬鹿かお前は。禎実もこっちこりゃあ。
禎実　うん。
婆　悪かったね。子供のあんたに辛い思いさせてまってね。
禎実　ばあちゃん。
母　おばあちゃん、出ていかなくて良かったね。
母　・・・うん。
禎実　ばあちゃんきっと、これでもうわがまま言わないからな。
勇樹　本当？
禎実　何それ。まるで私がわがままみたいだがね。
婆　まぁ、どっちにしても私は出て行かないけどね。
禎実　出てってもいいよ…。
母＆父　えっ！！？
禎実　禎実、あんた、なんて事言うの！
母　私、ばあちゃんが出ていくって言った時ちょっと嬉しかった。
禎実　禎実、あたしゃ出て行かないって。
婆　婆ちゃん、無理してない？
禎実　しとらんしとらん。
婆　出てきたかったら、出て行ってもいいんだよ。
禎実　まぁ、どういう子よあんたは
婆　やっとウチにも平和がくる。
禎実　禎実、いい加減にしなさい。
父　お父さんだって、婆ちゃんが出て行くって言ったとき
禎実　ちょっと「ニッ」って笑ってた。
父　笑ってないよ。

婆　何うれしそうな顔しとんの。
禎実　鼻開いて「ニッ」て笑ってた。
婆　まあ、この子は子供の頃からすぐに顔に出る子だったでね。
母　お義母さん、禎実の言った事は忘れてください。
婆　こんなもん忘れられるか。
母　禎実、少し口が滑っただけですから。
婆　じゃあ本音では、そう思っとったって事？
禎実　うん。
婆　あんた、どういう躾しとんの！？
母　正直な心を持つようにって。
婆　じゃあ、あんたも本音えはそう思っとったってこと！？
母　どうしてそういう風に思うんですか。少しは反省してくれたと思ったのに。
婆　反省したで、ここに残るって言ったの
禎実　反省したって、心入れ替えなきゃ意味ないじゃない。
婆　何でも変わりゃいいってもんじゃにゃあんだわ！
父　少しは変われよ。
婆　変わらんといかんのは勇樹、お前だわ。
母　あなたがしっかりしないからいけないのよ。
　お義母さんに好きなように言われて。
父　お袋が好き勝手言うのは、俺のせいじゃないだろ。
婆　私が好きなこと言って、何が悪いの。
禎実　婆ちゃんやっぱりこの家出て行ったほうがいい。
婆　私が嫌なら禎実、あんたが出てきゃあ
禎実　ここは私のウチよ。
婆　違う、私とじいちゃんが建てた家だ！
母　ここは皆の家でしょ！
婆　英恵さん、あんたも気に入らんかったら出てってもええのよ。
母　私は出ていきません。
　お義母さんこそ、無理しなくていいんですよ。
婆　なに、そりゃ私に出て行けってこと？
母　違います。だけど
婆　「だけど」ってなんだい、「だけど」って。
父　おい、仲直りしたんじゃないのかよ。
母　したわよ。
婆　私は、した覚えなんかにゃあ。
母　姑だからっていい加減にしてください。
婆　嫁だからって偉そうにすんじゃないよ。
母　足で乗るなあーっ
婆　そんなの関係にゃあ！
亮　何でまた喧嘩してるんだよー！やめろってばー！
全員　どけー！
　（（亮　転がされる））
亮　婆ちゃん！

亮　あのときは本当に大変でした。婆ちゃんは泣きながら怒るし、母さんは母さんで婆ちゃんに食ってかかるし、家の中は戦争状態でした。一時はどうなる事かと本気で心配しましたが、その場はなんとかおさまり、またいつもの生活に戻ることができました。その後も婆ちゃんと母さんは毎日のように喧嘩をし、時には妙に仲良くなって、かと思えばまた喧嘩になる。その繰り返しでした。それから一ヵ月後、婆ちゃんは突然倒れ、救急車で病院に運ばれました。風をこじらせて肺炎になっていたのです。母さんは救急車の中でも、病院についてからも、ずっと婆ちゃんに付き添っていました。婆ちゃんは朦朧としながらも、空をつかむように手をのばし、「英恵さん、英恵さん」と母さんの名前を呼び続けていました。母さんはその手をしっかりと握り締め、その声にこたえるように「お義母さん、お義母さん」と泣きながら声をかけ続けたのです。三日三晩母さんは眠ることも忘れて婆ちゃんの傍についていました。けれど、その甲斐もなく、四日目の朝、婆ちゃんは静かに息を引き取ったのです。お通夜でも葬式でも、母さんは気丈にふるまい、涙は見せませんでした。それなのに、いざ出棺のときになると、せきをきったように泣き出し、「お義母さん」と叫びながら婆ちゃんの棺にしがみついたのです。ｋ　毎日喧嘩ばかりしていた二人が、なぜ最期のそのときにお互い求め合ったのか、僕には不思議でなりません。婆ちゃんは母さんの名前を呼び続け、そして母さんは婆ちゃんの手を握り続けた。そのことが僕にはどうしても理解できないのです。そんな母さんも、今では毎日婆ちゃんに虞美人草の花をお供えしています。

母　亮！　亮！

亮　（ふりむく）

母　まんだここにおる。何しとるの。はよせんとお坊さん待っとるに。

亮　うん。父さんは？

母　仕事だわ。

亮　ああ、クリーニング屋から直接行くの？

母　何言っとるの。おとといから新しいとこに変わったがね。

亮　えっまた変わったの？

母　そうだわ。ほら、はよ行くよ。

祖実　お兄ちゃんまだ？遅いなぁ。

母　でしょ？ちっともこぉせんでいかんわ。

亮　母さん

母　何？

亮　それ、名古屋弁。

母　なにがぁ

亮　だから名古屋弁。婆ちゃんとおんなじ

母　なに言っとるの。そんなもの、使うわけないでしょ

亮　（笑う）そう？

母　まあそんなことどっちでもええわ。ほら行くよ。はよせんと。

亮　わかった。すぐ行くよ。

母　はよこやーよ。祖実も、ほら。

祖実　うん。（去ろうとして）お兄ちゃん。

亮　なに？

祖実　はよ、こやー（笑う）

禎実！！(向き直って)今日は婆ちゃんの一周忌です。この一年、町内の人達が毎日のように、婆ちゃんに花やお供えを持ってきてくれました。皆、ばあちゃんの話をして行くので、時折、まるで婆ちゃんがそこにいるような気持ちになることがありました。それは、母さんも同じだったみたいで、そんなとき決まってとても寂しそうな顔をしていました。婆ちゃんがいなくなってから、僕たちはこの町内の人達のあたたかさに支えられていた気がします。婆ちゃんが産まれ育って、そして死んでいったこの町。父さんがクビになったときには皆で万歳三唱してくれるようなちょっと変わった町内会ですが、僕はこの石山町が大好きです。例えこの先、大学や仕事でこの町から離れることになっても、また必ずここに戻って来たいと思います。きっとこの町も、みんなも、変わらず僕を待っていてくれる、そう思うんです。それじゃあ、そろそろ行きます。
じゃあ、また。